視　点

予想(期待)と信頼

司法当局が二人組の犯人を捕え、別々に拘束して連絡が取れないようにしているとする。犯人Ａも犯人Ｂも自分の利益だけ考えて行動するエゴイストであるとしよう。二人は自白することも､黙秘することもできる。二人とも自白すれば懲役5年、黙秘すれば、決定的な証拠がないので不起訴、犯人の一方だけが期限内に自白すれば、自分は懲役3年、相手は懲役7年と決まっているとしよう。

犯人Ａの立場で考えよう。犯人Ｂが黙秘してくれると仮定してみる。このとき、自分が自白すれば懲役3年であり、黙秘すれば自分は不起訴である。この場合は黙秘した方がいい。逆に、犯人Ｂが自白してしまうと想定してみる。自分も自白すれば懲役5年、黙秘すれば懲役7年である。この場合は、自白したほうが有利である。つまり、犯人Ｂがどちらを選ぶと予想するかによって、自分の選ぶべき道は変わってくる。犯人Ｂにとっても事情は同じである。

お互いが相手の行動をどのように予想するかにより、起こりえる結果は変わる。互いに相手が黙秘すると予想すれば黙秘、黙秘となるが、相手が自白すると予想すれば、自白、自白となる。犯人たちにとって後者が望ましくないのは言うまでもないが、これも将来を予想し、合理的に行動した結果である。なお、この二つのケースでは、二人とも相手がとった選択を前提とすれば、自分にとって最も有利な選択をしている。このような行動の結果得られる状態はナッシュ均衡と呼ばれている｡ちなみにナッシュはノーベル経済学賞を取った学者であり、彼を主人公にしたビューティフルマインドという映画が2001年に公開された。

このように、自分が選択すべき合理的な行動が、他の経済主体が選択する行動に依存しているため、それぞれの経済主体が他の主体の行動を予想し、その予想に基づいて合理的な行動をとったとき、二つ以上の安定した事態が発生し得ることがある。経済学では、これを複数均衡と呼ぶ。そして複数の均衡のうち、社会にとって最善のものが実現できないことを、協調の失敗（coordination failure）と呼ぶ。

所謂アベノミクスは、人々の予想（経済学では期待と呼ぶ）を変えようとする側面を持っている。大胆な金融緩和によって2%の物価上昇を目指すインフレ目標などは、それが実現すると予想させることによって人々の行動を変え、経済のパフォーマンスを変えようとするものである。協調の失敗からの脱出を図っていると理解することも可能である。

この政策の実現性の基本的な問題は、政府や日銀の行動によって、本当に人々の予想をうまく変えることができるかどうかである。もともと、人々が将来をどのように予想するかは、よく分かっていない。今回の政策によって人々の予想がどう変わるかも、事前に完全に知ることはできないのである。心許なさが付きまとう。実はアベノミクスのみならず、多くの経済政策、特に金融政策の効果は人々がどのような予想を持つかに依存していると考えられている。

このような危うさから逃れる道はあるのだろうか？あるかもしれない。お互いに話し合って、それぞれが将来どのような行動を取るかを約束することである。互いにその約束を守るという信頼があれば、みんなにとって満足できる結果が得られる。最初の例では、犯人A、Bの話し合いということになるので、社会全体の立場からは望ましくないが。団体交渉、労使協議、三者構成での話し合いは重要なのである。さらに、話し合いを通じて当事者間の信頼関係が形成されていくということも大切である。当事者を排除して、物事を決めていくことは危ういのだ。　　（主任研究員　高原正之）